

# グローバル化時代の少数民族教育の実態とその変容

—中国朝鮮族の事例—

比較教育社会学コース 趙 貴 花

Transformation of Ethnic-minority Education in a Time of Globalization:the case of Korean Chinese

Guihua ZHAO

This paper investigates the transformation of the ethnic-minority education in a time of globalization by exploring the case of Korean Chinese education in China. The main feature of the ethnic-minority education in China is bilingual education in ethnic-minority schools. The original policy was to teach Chinese to Korean Chinese students as the national standard language, while at the same time teaching Korean as their ethnic language, thus allowing students with both the national and ethnic identities. However, globalization has transformed the language of the “ethnic-minority” into that of the global capital and the “minority school” into a globalizing institution that now attracts new groups of students.

## 目 次

- I. はじめに
- II. 改革開放と中国朝鮮族の移動
- III. 朝鮮族学校の教育及び朝鮮族生徒のアイデンティティ
  - A. 朝鮮族学校の教育状況
  - B. 朝鮮族生徒の国民的帰属意識とエスニック・アイデンティティ
    - 1. 朝鮮族生徒の国民的帰属意識
    - 2. 朝鮮族生徒のエスニック・アイデンティティ
- IV. グローバル化時代の学校選択
  - A. 漢族学校を選択する要因
  - B. 朝鮮族学校を選択する事例
  - C. 朝鮮族学校を選択する漢族生徒と韓国人留学生の登場
    - 1. 漢族生徒
    - 2. 韓国人留学生
- V. 結びにかえて：少数民族教育の新しい意味

### I. はじめに

本稿の目的はグローバル化の進行する現代における少数民族教育の実態とその変容を、中国朝鮮族の事例をあげて調査し、考察することである。

中国の少数民族は公式には55に及ぶ。中国における2000年の人口統計によれば、その少数民族の人口総数は約1億643万人であり、中国総人口の8.41%を占める。その中で朝鮮族は192万3,842人である<sup>1)</sup>。中国政府は少数民族政策として少数民族の集住地区に自治機関を設置し、運営させることによって自治権を与えている。中国には現在5つの自治区、30の自治州、120の自治県(旗)、1200余の自治郷がある。

中国における少数民族教育とは、漢族以外の55の少数民族に対する教育を指す。「民族教育」とも呼ぶ。この少数民族教育の主要な特徴は二言語教育である。中国における二言語教育は、多数派の漢族の言語であり国家の言語である漢語と、各少数民族の独自の言語との二言語を教育しようとするものである。中国政府は二言語教育を公教育機関としての少数民族の学校で教授することによって、少数民族の子供たちが国民としてのアイデンティティと同時に少数民族としてのアイデンティティをも維持し両立することを、その政策主眼としていると考えられる。

中国において「朝鮮族」と呼ばれる中国朝鮮族は、朝鮮半島からの移民及び彼らの子孫とされ、中国の国籍を有する人々のことである。これまでの先行研究では、主に1860年～1904年(越境潜入時期)、1905年～1930年(自由移民時期)、1931年～1945年(強制集団移民時期)の三つの時期に現在の中国東北地区への大量の移住が

あったとされている<sup>2)</sup>。中国での朝鮮族教育は、移住初期の儒教教育以降の歴史的変遷を経て、1950年から上記のような二言語教育が公式に行なわれてきた<sup>3)</sup>。朝鮮族の二言語教育は、国家の標準的な言語としての漢語と民族語としての朝鮮語を平行して教授することである。例えば、北朝鮮と韓国では朝鮮語及び韓国語はその国の教育を担う唯一の言語であるが、中国では朝鮮族学校において漢語と朝鮮語とがペアとして教えられることによって、少数民族教育としての朝鮮語教育が成立してきた。

しかし近年になると、このような二言語教育は、中国の改革開放<sup>4)</sup>とグローバル化の流れの中でさまざまな変容を遂げている。1980年代以降、従来の中国東北三省に主に居住していた朝鮮族の各地域への移動が始まった。その結果、農村における朝鮮族学校は、生徒不足等の原因により維持が難しくなっている。もう一方、都市部にある一部の朝鮮族学校は近年、漢族や韓国人留学生が入学するようになった。このような新しい動向は、従来の民族学校における教育にグローバルな市場に応じた教育という新しい意味を付与する。

本稿では、朝鮮族学校における二言語教育(朝鮮語と漢語)がどのように行われているのか。そこで二言語教育を受けている生徒たちは、一体どのような生徒たちなのか、その中で朝鮮族生徒の二言語の習得が中国国民としての国民的帰属意識及び朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティと、どのような関わりがあるのか、グローバル化時代において朝鮮族はどのような学校選択をするのかに関して検討する。

なお、本研究の調査は、延吉市のA校とハルビン市のB校で行った。ここで両校についての概要を記しておく。

朝鮮族は主に中国の東北三省(黒龍江省、吉林省、遼寧省)に居住しており、そこで90%以上が農民として農村での共同体的な生活をしてきた<sup>5)</sup>。吉林省には延辺朝鮮族自治州があり、自治州において公式言語は漢語と朝鮮語の二言語である。住民の大多数は朝鮮族で彼らは自治州で地方自治権利を行使する主体民族である。延辺朝鮮族自治州には延吉市という州都があり、市内には朝鮮族の幼児教育から大学(延辺大学)教育まで比較的整った民族教育体系が形成されている。延吉市のA校は、毎年北京大学や清華大学のような一流大学へ進学する生徒が15名前後いて、90%の生徒が大学に進学するという公立朝鮮族の進学校である。一方で、黒龍江省は地理的に中国の東北部に位置し、その省都はハルビン市である。延吉市と異なってハルビン市の

公式言語は漢語のみで、朝鮮族は漢族と混住している。B校は、ハルビン市において唯一の公立朝鮮族中高一貫校であり、黒龍江省において唯一の「少数民族省級模範高校」である。全校生徒数の半分が黒龍江省におけるハルビン市以外の地域からきた生徒である。

調査は2005年3月に2週間をかけてこの二つの学校で行った。インタビューに答えてくれた人は全部で40名近くになる。男女両方、教師、生徒(朝鮮族、漢族、韓国人留学生)、保護者などで構成される。インタビュー以外に、授業や学校での諸活動の参与観察、そして関連文書やデータの収集を行った。

## Ⅱ. 改革開放と中国朝鮮族の移動

中国は、1978年の中国共産党11期3中全会の決議により、改革開放政策を開始した。改革開放により、中国の市場経済が始まり、海外への門戸開放が行なわれ、中国はグローバル化時代に踏み込んでいった。改革開放による市場化は、中国全土での均等な発展をもたらしたのではなく、東部沿海地域にかたよって集中し、経済の地域的な不均衡を広げていった。したがって、それに刺激されて内陸から東部沿海地域への人口移動が急激に進行することになった。

人の移動が激しい今日において、中国朝鮮族の活動の場も東北三省に限られなくなり、国内及び国外への移動が始まった。その結果として、中国東北地区における朝鮮族子供の数が減少し、朝鮮族学校が減り始めた。特に高学歴者の場合は、経済が発展している大都市及び沿海地域を移住先に選ぶことが多い。したがって、今までの朝鮮族が集住する地域から他の地域へ出て活動するためには、これまで朝鮮語を第一言語として使用してきた朝鮮族にとって、中国における共通語の漢語を習得することが重要になってきた。

朝鮮族の移動先は国内においては北京、天津、青島、上海、深圳等の大都市へ拡大しつつある。北京における朝鮮族の人口は、1990年の中国の人口統計によれば7,689人になる<sup>6)</sup>が、2000年の人口統計によれば2万369人に達する<sup>7)</sup>。中央民族大学の黄有福教授によれば、2006年現在の北京における朝鮮族の人口は6~7万人に上り、東北三省を離れた朝鮮族は25~50万人と推測される。これは朝鮮族人口の13~26%に相当する<sup>8)9)</sup>。海外への移動は韓国、日本、アメリカなどに及ぶが、その中で一番多く彼らが移動した国として韓国があげられる。2002年の韓国法務部資料によれば、韓国における朝鮮族は19万8,037人(その中に不法滞在

が7万9,737人という数字が出ている)に達する<sup>10)</sup>。朝鮮族にとって、韓国は朝鮮語が通じるから行きやすい国であるし、同じ仕事の場合、韓国は中国より賃金が高いため移住の魅力的な場でもある。しかし、韓国語は中国で使われている朝鮮語と文法は同じであっても、語彙やアクセントに違いが見られる。韓国経済の発展とともに韓国語の国際的な言語価値が高まっている中で、朝鮮族にとって韓国語は中国で使用している朝鮮語より有効な新しいグローバル化時代の言語になっている。

改革開放以降、特に1992年に中韓建交として中国と韓国が国交正常化を果たして以来、中国朝鮮族は国内及び国外へ動いている。これは彼らがグローバル化の波に乗っている現象である。彼らは、新しい活動の場における使用言語の重要性に気づき、漢語に対してもまた今まで習ってきた朝鮮語と少し異なる韓国語の習得に対しても新たな認識をもつことになった。

### Ⅲ. 朝鮮族学校の教育及び朝鮮族生徒のアイデンティティ

#### A. 朝鮮族学校の教育状況

朝鮮族学校での教育とりわけ二言語教育は、どのようなものなのであろうか。以下は、筆者が上記の朝鮮族の集住地区と呼ばれる朝鮮族が多く居住している地域の延吉市にあるA校と、朝鮮族が漢族と混住しているハルビン市にあるB校で行った調査データをもとに両校の教育状況を叙述したものである。

A校とB校とも、学校教育において言語教育に重点を置き、朝鮮語と漢語の二言語に通じる生徒の養成と外国語教育(主に英語、日本語)を重視している。さらに、両校は生徒の総合能力の養成にも力を注ぎ、国内及び国外において活躍できる人材をつくることで学校の特徴を発揮しようとしている。そして、近年になって外部との交流も深め、国内及び国外との姉妹校作り、他民族そして留学生への積極的な受け入れの開始等、時代に応じた二言語教育のメリットを高める対応をしようとしている。

A校とB校をとりまく言語環境は以下のとおりである。

地域と家庭の言語環境に関しては、すでに言及したように延吉市の公式言語は漢語と朝鮮語の二言語であり、したがって、A校の朝鮮族生徒たちは地域と家庭において主に朝鮮語を使用する環境に置かれている。しかし、B校の朝鮮族生徒たちは、地域的環境として

漢語が第一言語である。家庭の言語環境としては、ハルビン市内出身の生徒は漢語が主であるか若しくは朝鮮語と漢語の併用が一般的である。近郊地区からきた生徒の場合は、これまでの家庭生活で朝鮮語のみ使っていた場合が多い。

学校空間での教授言語と日常会話に関しては、A校は教授言語から日常会話まで朝鮮語中心の比較的単一な言語使用状況である。B校は、学校の教授言語及び日常会話において漢語が主で、ときには朝鮮語も使用する程度である。したがって、B校におけるハルビン市内出身の朝鮮族生徒は漢語が第一言語であり、そのため朝鮮語をあまり話せない生徒が多い。しかし、B校の近郊地区からきた朝鮮族生徒は朝鮮語が第一言語で、漢語はあまり話せない。結果として、A校のような集住地区の朝鮮族学校であれ、B校のような混住地区の朝鮮族学校であれ、朝鮮語と漢語の両方とも習熟した生徒は少ない。

次に、両校で二言語教育に用いられる教科書に注目しよう。

A校とB校の朝鮮族生徒は、現在使用している教科書について一般的に不満をもっている。中国東北地区における朝鮮族学校では、延辺出版の『朝鮮語文』教科書と『漢語文』教科書を使用している。大学受験の時も一般的に朝鮮語文と漢語文この二つの科目において、延辺出版の教科書から試験問題を出すことが規定されている。

例えば、現在使用している『漢語文』教科書に関して、A校の延吉市出身の朝鮮族生徒の中には、内容的に古くて易しすぎて、面白さが足りないと指摘する者がいる。一方で延吉市の近郊地区からきた生徒の中には難しいという声がある。実際に、A校は吉林省で統一普及されているMHK(中国少数民族漢語能力試験)<sup>11)</sup>を採用しており、MHKに合格した生徒は、大学受験の時『漢語文』の試験を受ける必要がない。MHKの試験内容は、延辺出版の『漢語文』教科書の内容より難度が高いからである。したがって、A校の漢語文科目の教師は生徒たちの漢語能力を高めるために『漢語文』教科書を中心に授業をするのではなく、課外の教材を使う場合が多くなっている。

B校では、漢語文科目においては、高校二年生まで漢族学校用の全国統一編纂の『語文』教科書を使用している。しかし、高校三年生は大学受験のために延辺出版の『漢語文』教科書を使う。B校において、多数のハルビン市内出身の生徒には『漢語文』教科書は易しすぎるし、他方で、近郊地区からきた朝鮮族生徒は第一言

語が朝鮮語であるため、『語文』教科書に難しさを感じることがある。

次に、『朝鮮語文』教科書に対しても生徒たちは批判的である。特に延吉市では、学校の図書館や地域の書店から韓国の本が容易に入手できる。ハルビン市では書店では韓国の本が入手しにくい、生徒たちはインターネットで韓国のサイトをクリックし韓国語の文学作品等に接することが多い。このように、A校とB校の朝鮮族生徒たちは韓国語を接することによって、現在学校で使用している『朝鮮語文』教科書に対して「古く、窮屈で、実用的でない」と考えるようになった。生徒たちにとって、朝鮮語文科目はただ試験のために勉強する科目になってしまっている。朝鮮語文科目を教えているA校の教師からも教科書の内容が古いという声があった。朝鮮族の民族教育において極めて重要な朝鮮語文科目の教科書が、生徒の興味を引くことができなくなり、受験勉強のためのものに限られるということは、学校における民族語の学習が生徒たちにとってどれぐらい意味があるかという疑問をもたせる。このような状況に応じて、2005年から朝鮮族学校における漢語文の教科書と朝鮮語文の教科書の改革作業が行われはじめた。しかし、漢語文の教科書に関しては、朝鮮族の集住地区と朝鮮族が漢族と混住する地区の生徒の漢語レベルに差があるため、その改革に難しさがみられる。

以上、A校とB校における教育とりわけ二言語教育について検討した。両校とも言語教育を重要視し、民族語と漢語の二言語に通じるうえにグローバル化時代に適応するための外国語を身につけさせようとしている。しかし、長年二言語教育に専念してきたにもかかわらず、二言語に通じる生徒を養成することは必ずしも成功していない。その原因の一つには、漢語文と朝鮮語文の教科書自体が生徒たち及び教師を満足させるものではないことがあげられる。特に、中韓建交とともに韓国の映画やドラマそして韓国の本等が中国に入ることによって、朝鮮族生徒は韓国の文学書も容易に手に入れることができるようになった。したがって、朝鮮族は今まで中国で使用してきた朝鮮語は北朝鮮の言葉に近いものであることに気づいてきた。韓国の経済成長とともに韓国語の国際的な価値が高まる中で、現在朝鮮族生徒を魅了している言語は朝鮮語より韓国語である。朝鮮族学校で使用している朝鮮語文の教科書も北朝鮮の言語に近い、教科書としての魅力を失っている。漢族学校に通う朝鮮族生徒の増加と漢族生徒及び韓国人留学生が朝鮮族学校に通うという双方

向の動きの中で、朝鮮族学校はより多様な生徒のニーズを満たす学校運営をしなくてはならないという課題に迫られている。

## B. 朝鮮族生徒の国民的帰属意識とエスニック・アイデンティティ

中国の少数民族教育の重要な一環としての二言語教育が、公教育機関としての朝鮮族学校において実施されることによって、そこに通っている朝鮮族の生徒たちはどのような国民的帰属意識とエスニック・アイデンティティを形成しているのだろうか。

### 1. 朝鮮族生徒の国民的帰属意識

筆者のインタビューに応じたA校とB校の朝鮮族生徒たちは、全員が「中国人」としての国民的帰属意識を強固に持っていた。彼らの答えとして、以下のようなものが挙げられる。

「中国の朝鮮族は、たしかに韓国人や北朝鮮人とは同じ民族ですが、そこ(韓国, 北朝鮮)は私の祖先が住んでいたという所であるだけです。中国こそ私の国です。」(Dさん, A校の高校三年生, 女性, 延吉市出身)

「中国は私が属する第一の『祖国』で、韓国と北朝鮮はそれに次ぐものです。スポーツの試合とかの場合は、まず中国のチームを応援します。」(Mさん, A校の高校三年生, 男性, 延吉市の近郊地区出身)

「私は中国に生まれ、中国で育てられたから中国人です。漢語は、今中国にいるからできないといけません。しかし、漢語が自分の言語だという気はしません。朝鮮語のほうが、私の気持ちをよく表現できるし、一番親しみを感じさせる言語です。」(Cさん, B校の高校三年生, 女性, ハルビン市の近郊地区出身)

上記のように、A校とB校の朝鮮族生徒たちは「中国人」としてのナショナル・アイデンティティが強い。そのうえで、Cさんのように漢語は中国で生活するために必要な言語であるが、朝鮮語が自分の言語だ、という生徒もいる。この事例からは、国民的帰属意識とエスニック・アイデンティティの間の微妙なバランスが伺える。

### 2. 朝鮮族生徒のエスニック・アイデンティティ

朝鮮族の集住地区にあるA校の生徒たちの中には、

朝鮮語が第一言語であり、ふだん朝鮮族の間で生活をしているため、漢族の人とあまり接したことがない生徒が多い。そうした生徒の中には、「朝鮮族」という民族的帰属意識に関して特に意識していない生徒もいる。それに比べて、朝鮮族が漢族と混住している地区にあるB校の生徒たちは、地域の第一言語が漢語であると同時に漢族と接するチャンスが多い。こうした生徒たちは、いつも漢族に接することから自分の民族的アイデンティティを意識する機会が多い。B校の生徒の中には、たとえ漢族の友達のほうが多く、朝鮮語ができなくても民族的帰属意識を相対的に強く持つ生徒がいる。そのB校の生徒からは以下のような朝鮮語への意識的な発言がみられた。

「朝鮮語は朝鮮族にとって一番根本的な言語だと思います。だから、朝鮮語をちゃんと学びたいけど、客観的な要素(周りの人たちが主に漢語で話す、朝鮮語の教科書は魅力がない)の影響が大きいです。」(Qさん、B校の高校三年生、女性、ハルビン市の近郊地区出身)

「朝鮮語が漢語よりもっと耳に慣れてるし、親しみを感じます。」(Xさん、B校の高校三年生、女性、ハルビン市の近郊地区出身)

このように、B校においては朝鮮語は朝鮮族の生徒たちの民族的帰属意識のありかたと緊密な関係があることが分かる。その一方で、次のように朝鮮語が自分の民族的帰属意識とほとんど関係がないといったような発言もある。

「朝鮮語を習うのはただ試験のためです。朝鮮語の授業は面白くないから、授業中に寝る人が多いです。」(Pさん、A校の高校一年生、男性、延吉市の近郊地区出身)

「私自身は朝鮮族として、漢語以外に朝鮮語ができるという言語優勢があるから、それはいいと思います。しかし、その他には特に誇りとか持っていません。」(Jさん、A校の高校二年生、男性、延吉市の近郊地区出身)

「私は朝鮮語があまりできないけど、漢族より朝鮮族の友達ともっと親しくなれます。それは同じ民族だからです。」(Wさん、B校の高校二年生、男性、ハルビン市出身)

上記の事例からみれば、B校のQさんとXさんは朝

鮮語が朝鮮族にとって一番基本的な言語だと認識しており、対してA校のPさんは日常的に朝鮮語を使用しているにもかかわらず、朝鮮語への特別な認識はもっていない。A校のJさんの場合は、朝鮮語を社会進出のための有利な道具と考えていることが見受けられる。ここで興味深いことは、A校の朝鮮族生徒たちは、日常的に朝鮮族に接することが多く、朝鮮語が漢語より熟達しているにもかかわらず、朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティを特に意識していないということである。対して、B校の朝鮮族生徒たちは朝鮮語がよくできなくても民族的帰属意識が強い傾向がある。

上記のように、朝鮮族の生徒たちの中国人としてのナショナル・アイデンティティと朝鮮族というエスニック・アイデンティティとは微妙なバランスを保っている。朝鮮族という民族的帰属意識は民族語の朝鮮語の能力と必ずしも一致することではないことが言える。中国政府による少数民族教育政策は、朝鮮族学校という公立学校を作って、そこで漢語と民族語のペアとしての二言語教育を実施している。上記のような朝鮮族が、中国国民としての国民的帰属意識を強くもち、かつ朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティを重層的にもっていることは、中国の二段構えの少数民族政策が機能していると言えるだろう。

#### IV. グローバル化時代の学校選択

改革開放の実施以来、中国国内における共通語としての漢語の重要性がますます高まり、また朝鮮族の地理的移動にともない脱農業といった変化が起こる中で、朝鮮族の民族教育観はどう変化してきているのだろうか。自分の子供のために、あるいは自分自身のために、彼らは学校とその教育とをどのように選択しているのか。延吉市とハルビン市における進路としての学校選択は、主に朝鮮族学校と漢族学校の二種類に分けることができる。以下では、まずこの朝鮮族学校と漢族学校の選択要因について検討する。さらに、今回調査の過程で、朝鮮族学校であるA校とB校に漢族生徒と韓国人留学生が入学していることが分かった。彼らが朝鮮族学校を選択した要因は何であろうか。

##### A. 漢族学校を選択する要因

中国において朝鮮族が漢族と混住している地区は、過去においても漢族学校に通う朝鮮族の子供が多かった。1989年の統計データによると、中国の東北地区における瀋陽、長春、ハルビンの三大都市の朝鮮族生徒

の70-75%が漢族学校に通っている<sup>12)</sup>。

それに比べて、朝鮮族が集住し、民族の伝統も強固に伝承されている延辺朝鮮族自治州の場合は、朝鮮族生徒の9.22%が漢族学校に通っているにすぎない<sup>13)</sup>。しかし、近年、延辺朝鮮族自治州の朝鮮族生徒の中にも漢族学校に通う生徒が増えつつある。それに関する正確な数値は把握できないが、本研究の調査から漢族学校に通う朝鮮族生徒が増加している傾向をさまざまな場面で観取することができた。例えばA校の校長は、2005年現在延吉市における漢族中高一貫校であるV校には、全校生徒の20%を占めるまでに朝鮮族生徒が「増えた」ことを指摘している。

このように、漢族学校に通う朝鮮族の子供の増加はどのような原因があるかに関して以下の二つの事例を検討したい。

**事例1** Rさん。女性。朝鮮族。A校の漢語文科目教師。Rさん自身は小学校から漢族学校に通った。現在9歳の子供が一人いる。この子供は、幼稚園は漢族幼稚園に通い、小学校一年生と二年生は朝鮮族学校に通い、小学校三年生からまた漢族学校に通い始めた。現在は小学校三年生である。家庭においては、漢語を主に使う。しかし、子供に朝鮮語を忘れさせたくないため、家で朝鮮語も使う。子供を漢族学校に転校させた理由に関しては以下のように語る。

「われわれ夫婦二人とも漢族学校に通いました。だから、家では主に漢語でしゃべっています。しかし、子供に朝鮮語を忘れさせたくないの、朝鮮語も意識的に使います。うちの子は、すでに二年間朝鮮族学校に通ってましたので、基本的な朝鮮語は全部できます。漢族学校に転学させたのは、この延辺地区は朝鮮族人口が急激に減少しており、子供たちも将来これまでと異なる進路選択を行うことになるからです。延辺に留まっているとはかぎらないでしょう。だから、チャンスをより増やすためです。」

**事例2** Sさん。女性。朝鮮族。B校のコンピューター科目教師。Sさん自身は小学校から高校まで漢族学校に通った。大学卒業後ずっと地元の漢族学校で教え、その後現在のハルビン市のB校に転職することになった。Sさんの子供は小学校からずっと漢族学校に通った。現在はハルビン市内の漢族学校の高校一年生である。家で、Sさんは子供と朝鮮語、漢語両方を使って話す。子供は朝鮮語が話せないし、書けないが、少しは聞き取れる。

次は子供を漢族学校に通わせた原因に関するインタビュー内容である。

問：なぜ子供を漢族学校に通わせたんですか。

Sさん：理由は簡単です。漢族学校は教師たちの教え方が上手だからです。そして、教える知識量が多いです。

問：子供が民族語(朝鮮語)ができないことについて、どう思いますか。

Sさん：それはしかたないですね。選択しなければならないじゃないですか。選択するなら漢語のほうにします。

問：子供が将来社会に適応しやすくするためですか。

Sさん：それはそうですね。もう一つは、大学では全部漢語で教えるから漢族学校を卒業していたほうが有利だからです。

上記二つの事例では、共通点は保護者の二人とも教育者であり、子供の将来の社会進出に有利なことを考えて漢族学校を選択したことである。そして、二つの事例とも朝鮮族として朝鮮語は捨てさせたくないが、学校選択において主要には漢族学校を選択することである。

本研究の調査からみれば、朝鮮族生徒が漢族学校に通う第一の要因は、主に漢語主体社会に良く適応するためである。これは上記の二つの事例から伺える。これに関しては、朝鮮族集住地区と朝鮮族が漢族と混住する地区を比較しても、あまり違いがない。実際にも、朝鮮族が漢族と混住する地区では、一般的に居住している主体社会が漢語社会であるため、漢族学校に通う子供が多かった。しかし、延辺朝鮮族自治州のような朝鮮族の集住地区では、従来は朝鮮族学校に通う生徒が大多数であった。しかし、現在は将来活動の場が自治州に限らず漢族社会に広がるため「漢語をよく勉強する」ことが重要視されてきた。そして、保護者の中で質のより高い学校を追求する傾向も見られるようになった。

第二の要因は、朝鮮族学校の廃校によって居住地の近くに朝鮮族学校がなくなったため、仕方なく漢族学校に通うという事態が挙げられる。

過去においては、朝鮮族の村ごとに朝鮮族小学校があり、朝鮮族の郷には朝鮮族中学校があり、県には朝鮮族高等学校があった。したがって、朝鮮族の子供たちは大学進学まで民族言語と文化が維持できた。しか

し、現在は朝鮮族の移動とともに村の朝鮮族学校は生徒がいなくなり廃校という状況にさらされている<sup>14)</sup>。延辺朝鮮族自治州の朝鮮族小学校は1985年までは419校であったが、1995年には177校に減少した。朝鮮族中学校の数は1985年の118校(中学92校, 高校8校, 完全中学18校)から、1995年の49校(中学34校, 高校8校, 完全中学7校)に減少した<sup>15)</sup>。黒龍江省の実態調査によると、朝鮮族小学校は1990年の382校から1997年には51校に減少し、中学校は1990年の77校から1997年に15校しか残らずほかの学校は全部廃校となったのである<sup>16)</sup>。

このように、朝鮮族生徒が漢族学校を選択するのは、中国における主体社会である漢族社会に適應するための漢語重視、質の高い学校への選好、朝鮮族学校の廃校によってしかたなく漢族学校に通うという要因があることが分かった。

## B. 朝鮮族学校を選択する事例

子供を漢族学校に通わせる朝鮮族保護者が増加しつつある一方、依然として朝鮮族学校に通わせる朝鮮族の保護者はどのような人たちであろうか。そして、朝鮮族学校であるA校とB校に通っている生徒たちは、どのような原因でこれらの朝鮮族学校を選択したのだろうか。

事例1 Nさん。女性。朝鮮族。A校の朝鮮語文科目教師。Nさんは小学校からずっと朝鮮族学校に通った。延辺で朝鮮語文科目の教師としての経歴は12年になる。Nさんにとっては漢語より朝鮮語を使い慣れている。現在7歳の息子が一人いて、延辺の朝鮮族学校の学前班<sup>17)</sup>に通っている。Nさんは子供を朝鮮族学校に入学させようと考えている。

「もともとは漢族学校に通わせるつもりだったんですが、うちの子が漢語を受け入れないので、今朝鮮族学校に通わせています。もともとの意図は、私が朝鮮語を使って生きてきて、やはり中国で生きるためには漢語をもっと上手にしなきゃいけないと思いました。それで、男の子は漢族学校に通わせようとしたんですが、うちの子が漢語を受け入れにくいみたいだし、漢族学校に行きたくないと言っているのです。それで、しかたなく朝鮮族学校にやっています。」

事例2 Yさん。女性。朝鮮族。B校の物理科目教師。Yさんには現在6歳の娘が一人いる。ハルビン市内

の朝鮮族小学校附属幼稚園に一年間通わせ、同じ附属学前班で一年間、現在はまだ同じ学前班に通っている。娘が上記の学前班に一年間通う時、担任の先生が四人変わった。これに対してYさんは非常に不満を持っている。そして、現在の学前班の先生たちは責任感がなく、教え方もよくないと批判的である。

「夫は自分が朝鮮族学校に通ったから、子供を漢族学校に通わせたくないと言うんです。彼は朝鮮族の子供は必ず朝鮮族学校に通わなくてはいけないと考えています。私も娘に朝鮮語を学ばせるのは将来にいいと思いますが、だからとして朝鮮族学校に通わなくてはいけないとは思いません。そして、今の朝鮮族学校は本当に責任をちゃんととっていません。」

上記二つの事例はかなり似ている状況である。もちろん、保護者の居住地や出身校という点において違いは存在するが、共通点としては、両者とも積極的に子供を朝鮮族学校に通わせているわけではない。

それでは、A校とB校の朝鮮族生徒たち自身はどう答えているのだろうか。

本研究のインタビュー調査から、この二つの学校の生徒の中には「朝鮮族だから朝鮮族学校に通わせる」という保護者の強い意図により、朝鮮族学校に通うことになったケースが多くみられる。また農村出身の生徒の中には、保護者が意識的に朝鮮族学校に通わせたというより、「家の近くに朝鮮族学校があったから通うことになった」という事例もある。また、「朝鮮族が朝鮮族学校に通うのは昔からの伝統じゃないですか。両親は考えもせず私を朝鮮族学校に通わせたと思います。」という事例もあった。そして、特に延吉市は朝鮮族の集住地区であると同時に、市内に小学校から大学まで朝鮮語で教える教育システムが整っているため、朝鮮族の子供が父母と同じく朝鮮族学校に通っているケースが多かった。加えて、大学受験の時、朝鮮語で受験できることから朝鮮語を第一言語として使用している朝鮮族生徒にとっては、朝鮮族学校に通うのが「大学に進学しやすい」という要因もあった。そして、これらの朝鮮族生徒たちは両親が自分に朝鮮族学校を選択したことに関して特に違和感を抱いていない。

## C. 朝鮮族学校を選択する漢族生徒と韓国人留学生の登場

### 1. 漢族生徒

1992年の中韓建交以来、中国でも韓国語の需要が高

まり、A校に新しい現象として漢族生徒の入学者が増えつつあり、2005年現在全校3,132名の生徒の中で漢族生徒が52名いる。このような漢族生徒はどのような生徒であり、彼らの朝鮮族学校に通う原因は何であろうか。

**事例1** Kさん。高校二年生。男性。漢族。延吉市出身。両親とも漢族。Kさんの朝鮮語は非常に流暢である。幼稚園は漢族学校に通い、小学校からはずっと朝鮮族学校に通っている。彼は、家では両親が朝鮮語ができないため、漢語だけ使っている。

朝鮮語は朝鮮族小学校に入ってから勉強し始めた。小学校に入るまでは、朝鮮語は少しもできなかった。Kさんは自分がどうして朝鮮族学校に通うことになったかについてはっきり分からないようだが、将来何をしたいかの質問について答える時、「自分が朝鮮族学校に通ったことで、言語的に有利だと思います。」と言い、そしてそれについて次のように語った。「朝鮮語は私が将来やる仕事において、役に立つと思います。たとえ、将来私に何もできない時があっても、私にはこの言語能力があるから、他の人が私を見る時、彼らよりつまり私と競争する人たちより有利でしょう。」

**事例2** Fさん。高校三年生。女性。漢族。お父さんは漢族、お母さんは朝鮮族。Fさんは小学校に入学するまでは、ずっと同じ吉林省の和龍市に住んだ。和龍市は朝鮮族と漢族の人口がほぼ半分ずつ占めている市であり、町では朝鮮語がよく耳に入る所である。Fさんが小学校一年生の時に家族と延吉市に引越し、延吉市内の朝鮮族学校に通い始めた。

朝鮮族学校に通うことになったのは、「漢語に加えてもう一つの言語が学べるからです」と語った。家での会話語は、お父さんとは漢語、お母さんとは朝鮮語である。両親の間には、お父さんは朝鮮語ができないからお母さんが漢語で話す。Fさんは、学校で友だちとは漢語を使わずに朝鮮語で話す。現在通っているA校では、「みんな朝鮮語を使い、漢語を使う人はごく少ないです」と言った。

Fさんは、今勉強している朝鮮語の教科書内容に関して、「全部理解できるし、難しくありません。」と語った。朝鮮族の文化や伝統に関する理解は主に朝鮮語科目の授業を通じて学んだ。それ以外は、韓国語の本を読んで理解する。韓国語の本は、学校の図書館から借りられるし、延吉市内の書店で購入で

きる。このような韓国語の本は、主に韓国で出版されている童話、小説、漫画などである。

上記の二つの事例からみれば、漢族生徒が朝鮮族学校を選択する要因としては、朝鮮語を第二言語として勉強することである。

1980年代以来の改革開放とともに、中国が速やかにグローバル化の流れの中に入り、特に近隣国である韓国との交流が頻繁に行なわれている。その中で、「韓国ブーム」とともに中国国内における韓国語を学ぶ人が急増している。朝鮮族学校も積極的に朝鮮族以外の生徒への門戸を開いた。したがって、上記のような朝鮮族学校にも漢族の子供たちが通う現象が現れる。朝鮮族の集住地区である延吉市では、朝鮮族が多数を占め、朝鮮語が第一言語として使われているため、言語と文化の面において漢族が朝鮮族の影響を受けやすい。そして、中国と韓国の交流が頻繁になっている中で朝鮮族が重要な架け橋の機能を働いている。

韓国語と中国朝鮮族が使用している朝鮮語はもともと同一言語であったが、韓国と中国の歴史が異なるため、言語においてそれぞれ国語と少数民族の言葉として位置づけられている。そしてすでに言及したように、韓国語と朝鮮語は文法においては同じであるが、語彙やアクセントにおいては違いがある。韓国語を身につけることは、漢族の子供にとっても将来の進路選択において有利であることと考えられる。したがって、二言語教育がなされている朝鮮族学校に、韓国語とほぼ同一言語である朝鮮語を習得させるために子供を通わせる漢族の両親が増えつつあると考えられる。特に延吉市のような朝鮮族の集住地区では、朝鮮族の間では主に朝鮮語で交流し、他の都市に比べて朝鮮語・韓国語の書籍がより容易に入手できる。したがって、上記の漢族生徒たちの事例で確認されたように、朝鮮語が全然できない漢族生徒でも朝鮮族学校に入っただけで朝鮮語の言語環境に入り込むことができる。そして、朝鮮語を朝鮮族生徒と同じぐらい駆使できるようになる。A校では、朝鮮族生徒より漢族生徒のほうがより二言語に通じる現象が起こっている。

## 2. 韓国人留学生

B校では、2003年から韓国人留学生を受け入れ始め、2004年から正式に韓国人留学生向けのクラスを設けた。2005年3月現在高校部の生徒数は850名で、その中に韓国人留学生が10名いる。中学部の生徒数は487名で、その中に韓国人留学生が40名いる。



事例1 Gさん。女性。18歳。韓国のソウル出身。お父さんは中国と貿易関係の仕事をしている。彼女はまず中国の広州にある漢族中学校で二年間勉強をし、その後ハルビンのB校にきた。彼女が中国に留学した理由は、お父さんが彼女に「あなたは勉強しないから韓国では見込みがない。中国はこれからますます経済が発展するから、中国語を勉強しなさい。」と言ったからである。

さらに、彼女が漢族学校ではなく朝鮮族学校であるB校を選んだ理由は「この朝鮮族学校には韓国人の知り合いが何人かいます。午前は朝鮮族の子たちと一緒に勉強しますが、午後は何人かの韓国人だけ集まって漢語を勉強するから楽しい」からである。つまり、彼女は中国で漢語を勉強する場として、漢族学校ではなく朝鮮族学校の二言語教育を利用しようとしている。

また、今通っているB校と普通漢族学校との違いについて彼女は以下のように語った。「漢族学校にいた時は、外国人が私一人だけだったので、あまり気遣ってくれなかったです。それに漢族の子たちとは話があまり通じません。」

彼女は今高校一年生であるが、高校三年生まで上がって、中国で大学試験も受けるつもりである。

事例2 Uさん。男性。26歳。韓国のギョンギ島出身。Uさんは韓国で5年間仕事をしてきたことがある。その間に、三ヶ月中国山東省に技術を教えに来る機会があった。2001年に、中国語が学びたくて韓国で中国語学校に一ヶ月通ったことがある。しかし、そこではあまり上達できなかったため、雲南大学に留学して国語学科で一年間勉強した。雲南は気候がいいから住みやすいが、方言がひどいと語った。

「ハルビンは言葉がきれいです。この学校(B校)は漢語をよく教えてくれます。ハルビンで他の大学にも行っていましたが、韓国人が留学生の90%を占めるから多すぎます。遊ぶにはいいですけど、韓国人の間では韓国語ばかり使われるから漢語が学べません。学校をいっぱい調べました。」

Uさんは二ヶ月後HSK(中国漢語能力試験)<sup>18)</sup>を受けるつもりで、もし8級に合格したら大学に進学し、もし合格できなければ中国内で貿易会社に就職する予定である。

上記二つの事例から見れば、韓国人留学生が朝鮮族学校を選ぶ要因は、B校で主要言語が漢語であるため

漢語が勉強できること、そして朝鮮語と韓国語が同じ民族の言葉であるため学校内で韓国語が通じるという点にある。この背景には、彼らの両親が中国と貿易関係の仕事をしているか若しくは本人が将来中国と関わる仕事を望んでいるという要因が影響している。

現在、黒龍江省に進出した韓国企業は1200社で、その中でハルビン市には200社がある。なかにはハルビン市に進出して10年以上経つ会社もある<sup>19)</sup>。このような韓国企業家たちはハルビン市の投資環境に関心をもち、投資している韓国会社が増えつつある。したがって、長期にわたって居住する韓国人たちの中には、子供を同行してくるケースもあり、彼らの教育における学校選択が重要な問題になっている。このように、中国と韓国の経済的な交流が進展するとともに人の交流も増え、その結果漢語を勉強する韓国人の子供が増えている。彼らの漢語の勉強の場として、朝鮮語と漢語の二言語教育が行われている朝鮮族学校が良い選択対象になっている。その中でも、漢語を主な使用言語としているB校のような朝鮮族学校には、さらにメリットが高まっている。

以上、朝鮮族学校に通っている漢族生徒と韓国人留学生に関して検討をしてきたが、朝鮮語を主要言語とするA校に漢族の生徒たちが入ってきたことは、A校が改革開放の時代の要求に応じて朝鮮族以外の生徒にも門を開いた結果である。漢語を主に使用しているB校が韓国人留学生の漢語学習のいい学校選択対象になっている現象は、民族学校としてのB校がグローバル化との接点を合わせ持っていることを意味する。

## V. 結びにかえて：少数民族教育の新しい意味

本稿では、中国の少数民族教育として公教育機関である朝鮮族学校における二言語教育の実態とその意味が、中国の改革開放政策の実施とグローバル化の中で、変容しつつあることを明らかにした。

中国政府の少数民族教育の特徴である二言語教育は、朝鮮族学校に通っている朝鮮族の生徒たちに「中国国民としてのナショナル・アイデンティティ」と「朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティ」の双方をそれぞれに維持させようとするものである。これは、中国の少数民族政策が国内における多民族の国民統合に一定の機能を果たしてきたと言えるだろう。

その二言語教育は改革開放以来、大きな変容を遂げてきた。市場経済とともに中国国内では人の移動が激しくなり、民族間及び地域間の交流も深まり、その中

で中国における共通語である漢語の使用価値が高まっている。したがって、朝鮮族の中でも漢語重視によって子供を漢族学校に通わせる動向がみられる。一方では、従来通り、子供を親と同じく朝鮮族学校に通わせている事例もまだまだ多くみられる。そうした生徒の中には、朝鮮族の間で生活をし、朝鮮語を話し、漢族との接触も少なく、民族的アイデンティティをあまり意識しないでいる生徒も少なくない。

しかし、近年の中国と韓国の交流が進展する中で、韓国語の需要が高まり、A校のような朝鮮語を主要言語とする朝鮮族学校に朝鮮語の習得を目的としている漢族の子供が増えつつある現象が、本研究の調査で明らかになった。そして、B校のような漢語を主に使用する朝鮮族学校に漢語の習得を目指した韓国人留学生も入りつつあることが確認された。このような状況は、従来中国政府によって「少数民族教育」と指定され自民族の生徒だけを対象にし、自民族の言語や文化を教えることによって民族の伝統を継承するという少数民族学校の教育に新しい意味を与えているのである。すなわち、少数民族学校における教育が、すでに「少数民族」に限定する教育ではなく、よりグローバルな市場に応じるものになっていることである。これは学校側が積極的に改革開放とグローバル化の流れの中で朝鮮族以外の生徒たちに門を開いた結果である。

そうした変化の中で、言語教育に使用する教科書への批判が高まっており、その内容の改定が進んでいる。朝鮮族学校の特徴とする二言語教育が、朝鮮族生徒や漢族及び韓国人留学生を魅了している。一方、さまざまな生徒の多様な需要にどのように対応し、民族学校の特徴をどのように生かすかは、現在朝鮮族学校における重要な課題になっている。

21世紀のグローバル化と新しい時代において、朝鮮族の民族語である朝鮮語の教育はこれからどうなるのだろうか。朝鮮族の移住先において、だれがその朝鮮語教育の役割を担うのか。彼らのエスニック・アイデンティティはまたどのように変化していくのだろうか。人の移動とそれにともなう移動地における新しい教育の姿はどのように描出可能だろうか。これらの点は今後の課題にしたい。

(指導教員 白石さや教授)

## 註

1) 정신철 1994 『한반도와 중국 그리고 조선족』(韓半島と中国そして朝鮮族) 도서출판 모시는사람들 p.56

- 2) 임계순 2003 『우리에게 다가온 조선족은 누구인가』(私たちに近寄ってきた朝鮮族は誰なのか) 현암사 p.50
- 3) 박청산 김철수 2000 『이야기 중국조선족력사』(物語 中国朝鮮族の歴史) 연변인민출판사 p.132  
姜永德 1992 東北朝鮮民族教育出版社漢語文編集室編集『延辺的漢語教學』『朝鮮族中小學漢語文教學四十年經驗論文集』東北朝鮮族教育出版社11頁
- 4) 1978年以来進められている中国の基本政策。農業の各戸経営、企業自主権の拡大、市場経済の推進、対外開放による外国資本・技術の導入などを内容とする。
- 5) 김상철·장재혁 2003 『연변과 조선족—역사와 현황』(延辺と朝鮮族—歴史と現況) 백산서당 p.121
- 6) 황유복 2002 『중국속의 한글학교 中国的韩国语学校』미·중학인우협회 p.128
- 7) 韓光天 2006 「中国朝鮮族の都市移動の実態に関する報告」『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク—「アジア人」としてのアイデンティティを求めて』中国朝鮮族研究会編 アジア経済文化研究所 p.159
- 8) 황유복 2002 『중국속의 한글학교 中国的韩国语学校』미·중학인우협회
- 9) 권태환·박광성 「조선족의 대이동과 공동체의 변화—현지조사 자료를 중심으로」(朝鮮族の大移動と共同体の変化—現地調査資料を中心に) 2005 『중국조선족사회의 변화—1990년 이후를 중심으로』(中国朝鮮族社会の变化—1990年以降を中心に) 서울대학교출판부 p.38
- 10) 김귀옥 『한국안의 조선족 여성들—심층면접 자료를 중심으로』(韓国における朝鮮族の女性たち—インタビュー資料を中心に) 2005 『중국조선족사회의 변화—1990년 이후를 중심으로』(中国朝鮮族社会の变化—1990年以降を中心に) 서울대학교출판부 p.207
- 11) 中国少数民族漢語能力試驗。学校において教育するための国家認定試験。
- 12) 황유복 2002 『중국속의 한글학교 中国的韩国语学校』미·중학인우협회 p.117
- 13) 김상철·장재혁 2003 『연변과 조선족—역사와 현황』(延辺と朝鮮族—歴史と現況) 백산서당 p.108
- 14) 황유복 2002 『중국속의 한글학교 中国的韩国语学校』미·중학인우협회 p.114
- 15) 同上 p.114
- 16) 同上 p.114
- 17) 就学前教育として、小学校に附設された一年制の幼児学級。
- 18) 中国漢語能力試驗。中国の教育部が設けた漢語が第一言語でない中国の少数民族、華僑及び外国人を対象とする中国語能力認定標準化国家試験。ランクは基礎段階と基礎後段階の漢語能力を4レベル11級に分ける。その中で、基礎レベルが1-2級、初級が3-5級、中級が6-8級、高級が9-11級になっている。
- 19) 黑龍江新聞 2005. 6. 30

参考文献

- 岡本雅享 1999 『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社
- 金強一 1999 “延边朝鮮族对南北观的是实证研究”《平和研究》第8号
- 佐々木衛 2005 「東アジアのグローバル化」『社会学評論』222日本社会学会編
- 出羽孝行 2001 調査報告「中国の朝鮮族の生徒の言語と民族文化の維持」異文化間教育15号, 198~208
- 中国朝鮮族研究会編 2006 『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク—「アジア人」としてのアイデンティティを求めて』アジア経済文化研究所
- 宮下尚子 2007 『言語接触と中国朝鮮語の成立』九州大学出版会
- 김상철·장재혁 2003 『연변과 조선족—역사와 현황』(延辺と朝鮮族—歴史と現況)백산서당
- 권태환 2005 『중국조선족사회의 변화—1990년 이후를 중심으로』(中国朝鮮族社会の变化—1990年以降を中心に)서울대학교출판부
- 박갑수 1997 「중국의 조선말과 남·북한어의 비교」(中国の朝鮮語と南·北韓語との比較)『이중언어학회지』
- 박청산 김철수 2000 『이야기 중국조선족력사』(物語 中国朝鮮族の歴史)연변인민출판사
- 임계순 2003 『우리에게 다가온 조선족은 누구인가』(私たちに近寄ってきた朝鮮族は誰なのか)현암사 p.50
- 정신찰 1994 『한반도와 중국 그리고 조선족』(韓半島と中国そして朝鮮族)도서출판 모시는사람들
- 최웅용·임채완·이장섭·강태구·윤순선 저 2005 『중국조선족사회의 경제환경』(中国朝鮮族社会の經濟環境)집문담
- 황유복 2002 『중국속의 한글학교 中国的韩国语学校』미·중한인우호협회